

①横浜市国際園芸博覧会を、A1クラスとして開催することについて

横浜市が提案している国際園芸博覧会を、国が関与して開催するA1クラスとすることについて、国としての意義は何か、どのような効果が期待できるのか。

- ・環境の変化に対して、我々自身のライフスタイル、まちづくり、コミュニティをどう変えていくのかという命題に対しチャレンジングする園芸博覧会とするべき。
- ・都市と農が本当の意味で融合した、21世紀のアジアないし日本型の田園都市をどういう風に形成するか、博覧会はそのバックキャストとして何をすべきなのか、を理解して考えるべき。
- ・インターネットやAI等はむしろ背景として、人類の社会課題を解決していくためのモデルを提示できるとよい。
- ・園芸博覧会を開催する意義は、園芸の振興が中心ということも、共通認識とするべき。

②国際的な参加招致について

より多くの国に参加を促すため、博覧会の魅力をどう高めていくべきか。

- ・生物多様性や地球規模の環境保全がどういうものか、具体的に体感できるものを見せてほしい。
- ・市民が参加して将来の新しい園芸文化を発信する場となってほしい。
- ・超高齢化社会にあって、「生きていてよかった」と実感できる空間を作ることが重要。
- ・エコツーリズム、アドベンチャーツーリズム、ユニバーサルデザイン等の考え方を取り入れて整理してほしい。
- ・過去を志向する博覧会も面白い。特に、日本の歴史は、自然との関わりがあり、ここにも重きをおいてもらいたい。

これまでの検討会における委員からの主な意見

③具体的な博覧会の会場計画やコンテンツについて

国としての開催意義をふまえつつ、国の支援の検討にあたり必要な具体的な会場計画やコンテンツの計画が示されているか。

- ・地域のためにも社会のためにも企業のためにも得だ、と思えるより具体的なコンテンツを示してほしい。
- ・輸送計画をつくるにしても、入場者数はどれくらいが適当であるのか、量を目指すのか、リピート率を目指すのかなど、博覧会を開催する上で前提となるフィジカルファクトを横浜市が示す必要。
- ・ゾーニングは20世紀の知恵であって、ゾーニングを超えるような空間の制御を考えるべき。

④上瀬谷地区のまちづくり及び博覧会のレガシーについて

2027年の博覧会の開催に不可欠な会場整備やアクセス整備が可能か。

博覧会のレガシーが求められている中、博覧会を踏まえた上瀬谷のまちづくりについての検討はどのようなものか。

- ・公共交通は脆弱。将来の横浜市にとっても有効な輸送アクセスを検討すべき。
- ・広域的な郊外部の将来設計をどうしていくのかという命題にもつながるので、よりダイナミックに広域的に展開していくぐらいの戦略が必要。
- ・博覧会後も引き続き農業経営というもの、儲かる農業経営とはこうなんだ、というモデルが示せるとよい。
- ・里地里山という伝統的な原風景をキーワードとすることで、博覧会後も研究発信拠点となるのではないか。

⑤市民や地域住民からの支持、サポートについて

博覧会の開催に不可欠の地元市民のサポートや盛り上りをどのように図っていくのか。

- ・博覧会までの期間、市民や関係団体を巻き込んでどんな取り組みをするかが重要。機運醸成を頑張してほしい。
- ・大阪万博から2年後の横浜での国際園芸博覧会をどのように相乗効果で盛り上げるか。